



TITLE:

海外日誌(五)

AUTHOR(S):

山本, 一清

CITATION:

山本, 一清. 海外日誌(五). 天界 1923, 3(30): 193-195

ISSUE DATE:

1923-05-25

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/159876>

RIGHT:

海外日誌(五)

Verkes Observatory, Williams
Bay Wisconsin, U. S. A.

山本 一 清

残して去つた。いぢらしくも潔き死であつた。

教授エドワード・エマソン、バーナードは宇宙的に其の達成をもつて尊敬せられた。然しながらそれを彼は己が單獨の努力で成就したのであつた。教授バーナムの言を再び用うれば、「最も酷しい困難に貧苦の爲めに最初から不利の地位に置かれながらも、彼は單獨にて人生の戦に闘つて言葉の最高の意味に於て自成の人であつた」彼の爲人は偉大な單純と謙遜と完全な無私と自己否定を以つて表はされる。特に深切な温和な精神。その友の困苦を自己自身の困苦としたやさしい心、彼を知る凡ての者から眞に愛敬せしめる様な人格者であつて其の家庭は心からの歡待の場所であつた。彼の逝去によつて天文學界は今や多大の寂寞を感じるも、彼の人格は我等の中に生きて、我等の思想及び感情を永く感化するであらう。(をはり)

前號バーナード氏發見の彗星表最後のもの、發見期日は一八九二年に訂正す。

* * * * *

永遠は永遠的播種者の畑である。

カミル フランマリオン

一月二十二日(月)

今夜、ブルースで一時間曝露のオリオン星雲を撮つた。之れはオリオン星雲附近の微變光星を撮るためであつたが、成功した。

一月二十三日(火)

バークハースト空で魚座S星附近の光度を測定する。

午後は十二時ケンウッド望遠鏡の寫眞裝置の準備をした。此の望遠鏡は、元・ヘル氏が、シカゴ市のケウンド街の自宅で觀測に用ゐてゐたもので、三十年來のものであるが、勿論、眼福用に作られてゐる。之れに黄色ガラスを用ゐて、眼寫々眞を撮るのである。今夜、始めてのこゝまで、七時から先づ焦點決定を行ひ、それから月、カストア星、それからオリオン四重星を撮影した。皆々上等、夜十時から曇り。

一月二十四日(水)

今夜も、十二時で月とカストア星とを撮影す。今夜の成績は頗る上等。月の曝露は三秒間最も好し。

一月二十五日(木)

午後五時から、英子と、天體寫眞のプリントをする。

今日、カリフォルニアのリク天文臺に居たライテン氏來訪。ハーバードへ赴任する途中であるといふ。夜遅くまでフロスト、リー、パインビー諸氏と共に話す。題は無し、但し強いて云へば「歐米天文臺總まくり」までも言はうか。空は曇り。英子は婦人會へ。

一月二十六日(金)

フロストのハーゲンの論文を見せられ、所謂「Dark Marking」についての批評と共に、ブルースで觀測をすゝめられた。何れ、月が往つて了つたら、やつて見やう。

今夜も、フロスト氏の室で、ライテン氏等と話す。

一月二十七日(土)

ライテン氏は今朝早く、シカゴを経てホストンへ行つた。

自分は、午前中、パークハースト室で四十時のルムフオド寫眞板の光度測定をやる。

午後四時、獨りで、バーナード氏の病床を見舞ふ。氏は豫想以上に衰へて、弱つてゐられる。

一月二十八日(日)

今日は蟄居。午後、ひるね。

夜、ブルースの十時及六時兩方に、黄色ガラスを入れて、焦點を検したが、古い種板を用ゐたので、失敗したらしい。

午後十一時、バンビー氏が、四十二時で二重星の觀測中、シリウスの伴星を見せようと言つて、呼びに来られたので、行つて見た。……大四十時で眺めた巨光シリウスの輝やき！望遠鏡の内部は眞晝の如く明るい。星からは御光が四方に出てゐる——その御光の中になるほど、微細なる白星が一つ、之れが其れだナと思つて見入る。一八三四年に、ベツセルが數理上から發見したもの、一八六一年、オルヴンクラークが實視的に發見したもの、その由來付きの其の星だ！

一月二十九日(月)

午後四時から汽車で、英子と共にレーキゼネバ町へ買物に行つた。アメリカの田舎町として模型的の町だ。但し寒くて、少々、風を引いたらしい。

今日、京都の美しいエハガキを五十枚ほど、バーナード氏の病床の慰安にもと思つて、ミス・カルパートに渡した。

一月三十日(火)

ねむくて、それに頭痛のためであり、午前十一時半起床、朝食はぬき。午後からは天文臺で讀書。

夜は曇り。

一月三十一日(水)

朝、天文臺に出て見ると、いつもの掲示板に大きな紙で、「今夕七時、村の小學校運動場に、オコノモナクと當村の中學生のバスケットボール試合あり、入場參拾錢」といふ掲示が出てゐる。夜は曇り、そこで自分等はダンビー教授と令嬢シモヌと共に試合を見に行

く。行つて見れば會場は大入り、天文臺の連中も殆んど總出、サリダン君までも夫人と子供をつれて席に納まつてゐる。——試合はペーの大敗！

二月一日(木)

今朝、バーナード氏は手術のためシカゴの一病院へ運ばれる筈であつたが、醫師の見るところでは餘りに重態で動かされない。聞く者皆今更驚く。

今日は朝暫くオリオンの星雲の研究物をしらべてゐた。十一時、ダンビー氏と共にブルース室を掃除す——之れで、皆の者が、バーナード氏の状態にあきらめを付けた様子だ。

夜は薄雲があつたけれど、自分はブルース望遠鏡を開けて焦點距離を決定。其の後、又、十二時塔に上つて之れの焦點を決定し、終りに月を撮影す。

今日はエメリー・パレット嬢の誕生日、うちのシモヌ嬢は祝ひの贈り物を携へて夕食の御馳走に招かれて行つた。

二月二日(金)

パーク、ダンビー、ストルーフエ及び自分の四人が、當分の間、二十四時を使用するためのプログラムが決められた。自分は土曜日の曜の夜半以後、水曜の夜半以前となる。自分としては、此の時間にルムフオド方面の撮影の外に、星雲の撮影をしたいと思ふ。

英子は風邪で就床。

二月三日(土)

英子は終日就床。

自分も午後ひるね、夜はブルース望遠鏡で北極附近を撮影。今日は朝から非常に寒い。朝八時頃、華氏マイナス十五度であつたが、夜にもやはりマイナス十六七度であつた。今夜は天文臺で徹夜。夜半以後、十二時レンズが凍つて了つた。

二月四日(日)

今夜も寒かつた。しかし風が無いので、夜半前三時間ブルースで働いたけれど、割合に堪えられた。今夜は始め黃道光附近、次で昴團、小遊星、北極等を撮影す。夜半からは十二時塔にかけ上つて月を撮影す。

二月五日(月)

英子は床を離れた。空は曇り。自分は室内で昨夜の現像やら、讀書やら。

二月六日(火)

バーナード氏は益々重い。今朝専門醫も遂に呼ぶ。引した。昨夜はバーナード氏が枕元に詰めきつてゐたさうだが、今夜はダンビー氏が交代する。フロスト臺長も落ち付かぬらしく、天文臺でバーナード氏宅との間を幾度も／＼散歩して、何か考へてゐる。天文臺内の人聲も低い空は曇り、日没と共に天文臺の空氣は益々緊張した。午後八時……終に死去。天文臺の揭示板には「Adieu」といふ黒枠付きの揭示が出る。俄かに人の出入頻繁。殊に天文臺の事務室にはフロスト臺長とバーナード夫人とバレット氏と三人が大多忙。死去通知の電報電話の發達、葬式の諸準備など。

バンビー氏がつかりした顔付きでバーナード宅から歸つて來た。聞けばバーナード氏いよいよ臨終、息を引き取る時、枕頭にはバンビー氏のみであつたさうな。永年バーナード氏を援けたミス・カルダートは疲勞のため睡眠中であつたとのこと。最後まで、再び望遠鏡を覗くことをのみ念じながら、星に滿腔の未練を残してバーナードは去つた。いぢらしい死に方であつた。

二月七日(水)

コタンダ

今日午後二時、天文臺の中央圓堂でバーナードの葬式が営まれる。日本式に言へば「臺葬」かも知れない。レコード破りの學葬である。朝から式場の作り、花の飾りつけ、椅子の並べ方などで、一同多忙。揭示場には早くもウィルソン山天文臺からの長い電報が發表される。正午少し前に着く汽車で、シカゴ方面からはモートルトン、クリエス、フォクス等の諸教授、マテソンからはステビンズ教授來着さて、一時半、遺骸を入れた棺がバーナード宅を出て、北面の入口から天文臺内に運び込まれる。二時、皆着席すると共に、村の牧師ニウカム師の司式で開式。式は牧師の祈り、唱歌隊の「リ、エツツエン」兩氏及び村の一婦人」の合唱、牧師の説教があり、最後に臺長フロスト氏の弔詞演説があつた。集まつた者凡そ百名、シカゴあた

(三三)

りから馳せ参じた學者達四五名を除けば、大部分は村の人々で、何れも二十年來、バーナードと親しい交際をしてゐた人々であるからフロスト臺長の弔詞も比較的簡單で、別に履歷などは述べなかつた。しかし、それでも、バーナードの生涯を通じて、眞摯であつたこと、熱心で、又、愛情に富んだことは頗る力強く高調された。葬式さいつても之れきり、この世界的の巨人を葬るものとしては、形式的に悲慘なほどの式であつた。しかし、百人の會集は一人としてバーナードの親友に非ざるは無く、儀禮を抜きにして、眞に暖かきハートで以つて野邊送りなされた故人は、却つてこの「子供のやうな無邪氣なバーナード」を送る式としては、此の方法が適當であつたやうに思ふ。

式後、遺骸はミス・カルダート付き添ひ直ちにステーションに運ばれ、午後四時五分發の列車に乗せて、生れ故郷ナシヴィルに送られる。フロスト夫妻を始め、天文臺の人々、皆之れをステーションに見送る。パークハースト、リ、兩氏はナシヴィルまで送り届けて行つて、木曜日の彼地の公葬に列する筈。ダンビー氏はシカゴまで見送る。

天文同好會臨時總會記事

豫告の通り四月二十二日、京縣帝國大學理學部第四講堂に開く、荒後馬氏の開會の辭に次いで、海老恒治氏は昨年十月より本年三月末迄の會計報告をなし、會則の改正、幹部部の指名選舉後、助教授理學士上田讓氏はシヤブレイ氏の宇宙觀を題し、彼の觀たる宇宙觀を述べられ、其後理學博士新城新藏氏は虚空の微塵を題して先づ獨特の新學說を平易に説明された。兩先生の講演は別に天界紙上に掲載せらるる、事さなるべし。午後五時頃有益な講演を終り散會した。夜が快晴となりし爲め、中村氏、上田先生の指導にて天體觀測をなした。

幹事決定

臨時總會に於て本會の幹部は次の如く決定した。

幹事 上田讓氏 同 荒後馬氏 會計 海老恒治氏

獎勵金の贈呈

新幹事の協議に由り、長野縣上諏訪の三澤勝衛氏へ同氏の太陽觀測に對し獎勵金として金貳拾圓を贈呈した。(五月一日)